G—7　岩手県における高等学校家庭科の戦後史—教育課程の変遷を中心として—

岩手大教育　○清水　房　　郡山女大　工藤澄子
県立盛岡短大　大森　糎

目的　前回の学会では岩手県における家庭科の戦後史を、学科の変遷に焦点をすえて考究した。今回は教育課程を中心に、その変遷を辿り、戦後30年の高校家庭科に対して客観的評価をこころみ、そこから新しい時代への家庭科を創り出す手がかりを得たい。

方法　口段階での学習指導要領改訂の動きに対応し、一方では岩手の地域課題から吸い上げた教育課題をどううけとめて、自校の教育課程編成が行われてきたかについての実態を、女子高校（全日制普通科）3校を含む24校について文書や訪問による調査を行い、基礎資料を集収した。そのほか、文部省指定・県指定をうけた学校の研究集録、県教委の調査資料，各校の年史等によって考察をした。

結果　①一般家庭ク・ケ選択時代から、家庭一般4（芸・恥・家から6）、そして昭和38年度以降の原則必修時代，昭和48年度以降のすべての女子に必修の時代へという一連の変遷に対しては、家庭科をとりまく諸般の情勢との関係からそうせざるを得ない必然性は認めざるを得ないが、岩手の実態に立って考察した場合普及性は、昭和31年（71％）38年（93％）49年（100％）と増して行く一方、全日制普通科においては家庭一般4以外の選択を課する学校が、38年以降は減少した。　②大学進学率でみると、全日とくらべて昭和44年までは本州の方が上回っていたが、45年以降は急激に凌駕される。本県の場合戦後30年間、女子の大学進学率は20％台ずっと横這い状態を続けているという実態が明らかとなり、大学進学のために家庭科の学位を縮少するという考え方に対する一つの反論を得ることができた。